

# 幼児期・児童期における自己理解、他者理解、感情理解の関連性について

—自閉性障害児を中心に—

## A study of the relations among self-understanding, others-understanding and feelings-understanding in the infancy/the childhood

—Mainly on autism disorder—

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

田 中 明 子

Akiko Tanaka

### I. 本研究の理論的背景

#### 1. 「心の理解」研究

子安（1999）は「心の理解（understanding of the mind）」は「自分自身や他者の心の表象内容を推測すること」と定義し、「心の理解」自体が、他者理解を支える対人的知能という人間の心のしくみを構成する重要なモジュール（module）の一つであると同時に、空間的知能、言語的知能など他の様々なモジュールの支援を受けて発達することを実験心理学的に検討した。ここでの「心のモジュール説（modularity theory of mind）」とは、人間が環境に適応するための心のしくみが単一構造ではなく、それぞれが相対的に独立した複数の単位（モジュール）からなると考えるものである。子安は、Gardnerの「多重知能の理論」では、単に並列されていただけの7つの知能モジュールを、相互の関連性を重視し、仮説的に「知能のヘプタ=ヘキサゴン・モデル（hepta-hexagonal model）」（図1参照）として提唱した。

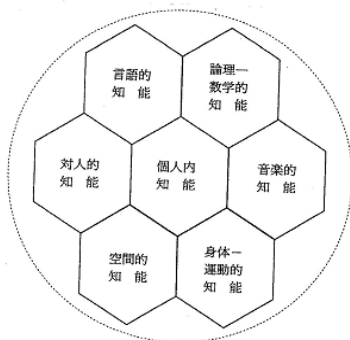


図1 知能のヘプタ=ヘキサゴン・モデル

「心の理解」のモジュールの発達過程を心理学的に解明することは、主として対人的知能と個人内知能の問題であり、対人的知能の発達、空間的知能の発達と密接に関連している（子安，1999）。三次元空間の中に生まれ、その中で適応し発達していく人間にとって、空間の幾何学あるいは地理学の構成要素、また顔や表情の識別といった刺激布置の図像学は重要な問題であり、他者の心の理解に空間的知能が大きく関与することを示唆している。つまり、顔や表情の理解は空間的知能の重要な部分であり、それが自己認識や他者認識にとって不可欠な要素なのである。また、子安（1990）は、人間は常に一定の時 - 空間の中で存在し、個人は、厳密な意味での「いまここ」を他者と共有することは出来ないという冷厳な事実があると述べている。そして、その事実が他者認識の一つの出発点であり、自己と他者との視点が必ずしも一致しないという視点の違いに気づくことが、自 - 他の分離の意識につながり、ひいては自己視点とは異なる視点に立つ他者がどのようなものを見ているかを推測することが、他者の心の理解の基礎にある重要な情報となるとしている。その自他理解の起源は、乳児期における養育者をはじめとする他者とのやり取りにさかのぼることができる（遠藤，1997）。

心の理解は、社会生活において円滑な対人関係を形成するためには不可欠であり、そのためには、他者の感情を適切に理解することが不可欠（笹屋，1997）となる。感情の理解は、また、気持ちの理解、共感における他者理解ともいえる。久保（1992）は、共感とは他者の感情を理解する知的な側面と自分自身の感情が動かされている情的な側面との両方からなる多元的な構成概念としており、Feshbach（1987）は、共感とは他者の感情状態を弁別する能力、他者の視点や役割をとる能力、他者の感情を共有できる能力としている。つまり、感情の理解とは他者の内的感情を的確に再現する推論手続きにほかならない（波多野，2003）。本研究では、子安の知能モジュールを理論的背景に置きながら、自他の理解、表情の理解で捉えられるところの感情理解の関連について、対人的知能、個人内知能、空間的知能との関連として検証していきたいと考える。

## 2. 「心の理論」研究

心の理解に関連した研究として、Premack and Woodruff（1978）から始まったとされる「心の理論」研究があげられる。「心の理論」を自他のふるまい、あるいは内的世界を説明・予測するための基本的枠組みであると特徴づけた遠藤（1997）は、「内的作業モデル（internal working model）」概念にもその特徴が当てはまるとしている。「心の理論」と「内的作業モデル」は、日常の対人関係に対して、ほとんどの場合「原則」としての「心の理論」と「個別細則」としての「内的作業モデル」を相互補完的に適宜組合せながら、その時々、自他の心情や行動に関する予測や解釈の精度を高めているのである（遠藤，1997）。

しかしながら、研究の歴史は、「心の理論」研究がほとんどの子どもがいずれ獲得、構成、あるいは発見するものとして捉えられ、その究極的な到達点に向けてのタイム・テーブル（発達過程のどの時点でどのような状態を呈するのか）の解明が主たる目的に据えられてきており、自己と他者の理解と

いう観点から直接、「心の理論」の起源や発達を明らかにしようとする向きは相対的に稀少であった(遠藤,1997)。遠藤(1997)は「心の理論」を有しているということと、それをいつも使って推論しているということは、基本的に別次元で考えて然るべきものであるとし、「心の理論」に発達のタイミングとは別種の個人差が確固として存在する可能性を仮定した。そして、個人の具体的な対人的相互作用の歴史が、個人が現実(複数ある中から)何らかの推論ストラテジーを選択する際に、一定のバイアスをもたらす可能性を想定している。

自閉性障害は、対人関係の障害、コミュニケーションの障害、想像的活動の欠如と常同的反復的行動のパターンという行動上の問題を基礎にして定義された障害である(Wing & Gould, 1979)。自閉症者の「心の理論」に関する諸知見は、見方によっては「心の理論」にも質的な意味での個人差が存在する可能性を窺わせるが、多くは“特異なあるいは別種の”「心の理論」の持ち主としてではなく、(健常者には存在する)「心の理論」を“欠いた”、あるいはその発達に著しい“遅れを来たした”ものとして描き出されてきた(遠藤, 1997)。自閉症児の「心の理論」課題の通過の背景においても、愛着形成に代表されるような個人の対人相互作用の歴史の影響が存在すること、さらには“自閉症文化”に特異な「心の理論」の存在を考えていく必要があると思われる。

### 3. 問題と目的

平成17年4月から施行された発達障害者支援法では、発達障害を「自閉症やアスペルガー症候群等の広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害、学習障害等の脳の器質的な障害に由来するコミュニケーション等の高次の脳機能の障害」と規定している。知的障害を伴わない発達障害は、「特有の困難さ」に対する理解を十分に得ることが難しい場合が多く、思春期における「親との共生関係から離れ、同性との仲間関係を築き、異性との関わり方を学び、年齢や価値観が異なる集団での振る舞い方を学ぶといった課題」に大きな困難を感じている。しかし、早期からの適切な支援があれば思春期適応の度合いが上がる事が分かってきており(杉山・辻井, 2001)、発達障害の早期把握・早期療育を通じて、子ども自身の戸惑いや不安を少しでも軽減していくことが必要である。そして「自己評価を保つこと」と『他者との関係性における自分』の良きイメージ形成に資する体験」を子どもが積み上げるための支援が思春期適応の鍵となり、その意味で本人の特徴に配慮した学校生活を小学校から保障することが重要であることが指摘されている(安達, 2005)。

自閉症を始めとする広汎性発達障害についての研究は、ここ10年間で飛躍的な進歩を遂げたが、「心の理論」の課題を自閉症に適用させた一連の研究(Baron-Cohen, Leslie, and Frith, 1985)は、自閉性障害の諸症状を説明するための心理学的理論の構築に向けられていた(石坂, 1997)。また、「自己意識」や「他者意識」については、これまでに高機能自閉症児において思春期以降に強まり変容することが臨床現場や研究等から示唆され、その独自の発達過程を機能連関の視点から明らかにしていくことが重要であること、誤信念課題の解決における直観的理解化の土台には情動の問題があり、そ

れが支援の視点を与えることが報告されている。吉井・吉松（2003）は、他者の心の理解を問う「心の理論」課題と自己理解の関係性を明らかにした研究がほとんどないことを指摘し、年長自閉症児と精神遅滞児を対象に、自己理解課題、他者理解課題、感情理解課題を実施し、これら3つの能力が互いに関係していること、自己理解の能力が比較的高い者は他者理解や感情理解の能力も高いことを報告している。

そこで本研究では、先行研究では取り上げられなかった、児童期から前思春期までの自閉性障害児の自己や他者の理解、感情の理解の特徴やその関連性について、健常児と比較する中で描出していくことによって、思春期適応に関わる支援のあり方を検討するための手がかりを得ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

#### (1) 健常群

IQないし精神年齢が自閉群と同程度と考えられる4歳から8歳までの幼児・児童計20名を対象とした。内訳は表1の通りである。

#### (2) 自閉群

〇県にある自閉症を対象とする療育機関に通う児童・生徒のうち、医師によって広汎性発達障害（PDD）ないしその下位分類に含まれる自閉症・高機能自閉症と診断されている児童・生徒で、療育機関の職員によって全課題の遂行が可能と考えられた者計22名（表2）を対象とした。

表1 健常群の生活年齢ごとの人数

年齢	4歳児	5歳児	6歳児	7歳児	8歳児
人数	4	6	1	8	1

表2 自閉群の生活年齢、精神年齢、WISCIIIまたはビネー検査におけるIQ

No	年齢	MA	VIQ	PIQ	FIQ	No	年齢	MA	VIQ	PIQ	FIQ
1	6:05	6:07			105	12	8:01	9:00	115	104	111
2	7:01	6:05			92	13	8:05	7:09	92	97	94
3	7:02	3:09	45	83	55	14	8:09	6:00	77	66	69
4	7:03	6:02	92	82	86	15	9:01	6:09	72	87	77
5	7:06	7:04			99	16	9:01	5:06			62
6	7:07	7:03	97	94	96	17	9:01	6:09	77	82	77
7	7:07	6:01	70	97	81	18	9:03	6:06	77	69	71
8	7:07	7:00	92	93	92	19	11:00	7:02			65
9	7:10	8:09	128	94	113	20	11:00	10:08	97	99	98
10	7:10	7:08	105	92	99	21	11:01	7:01			64
11	7:11	6:03	87	80	80	22	13:01	13:00	113	86	100

## 2. 実験内容

被験児全員に対して、実験者と1対1の場面で以下の課題を行い、子どもの応答を所定の記録用紙にそのまま記録した。要した時間は1人あたり約15分から30分である。

### (1) 他者理解に関する課題

2種類の誤信念課題（サリーとアン課題とスマーティー課題の2種類の心の理論課題）と視点取得課題（三つ山課題）を行った。サリーとアン課題は「アニメーション版“心の理論課題”（DIK教育出版）」の「ボールの問題」をノートパソコン（Panasonic CF-Y2）を使って実施し、スマーティー課題は実験者がお菓子の箱（「マーブルチョコ」の箱に鉛筆を入れたもの）を使って実施した。三つ山課題は、白い紙（縦30.5cm×横37.3cm）の上に、赤いボール（直径7cm）、画用紙で作った水色の四角錐（底辺が縦12cm×横12cmの正方形で高さが7cm）、黄色の直方体（縦7cm×横7cm×高さ14cm）の箱を置き、白い紙の四辺に順次小さい人形を立て、人形からおもちゃはどんな風に見えると思うか尋ね、4方向から見える図（カラー）を順不同に並べたシートから選ばせた。

### (2) 自己理解に関する課題

小島・池田（2004）が作成した自己理解に関する質問項目（表3）を用いたインタビューを実施した。

表3 自己理解に関する質問項目

「これから〇〇君（さん）自身のことについて質問します。」	
<自己評価>	1. 〇〇君（さん）は、自分のどんなところが好きですか？
	2. 〇〇君（さん）は、自分のどんなところが嫌いですか？
	3. 〇〇君（さん）のいいところは、どんなところですか？
	4. 〇〇君（さん）の悪いところは、どんなところですか？
<自己定義>	5. 〇〇君（さん）は自分のことをどんな人だと思えますか？
<理想自己>	6. 〇〇君（さん）は、どんな人になりたいですか？
<過去の自己>	7. 〇〇君（さん）は、昔はどんな人でしたか？

### (3) 感情理解に関する課題

Yamada（1993）により実験的に作成された、Ekman（1978）の6種類の基本感情カテゴリー（驚き、喜び、怒り、嫌悪、恐怖、悲しみ）に対応する表情線画図形（図2）を用いて、表情課題A（インタビュー）と表情課題B（選択課題）の2種類の表情課題（表4）を実施した。

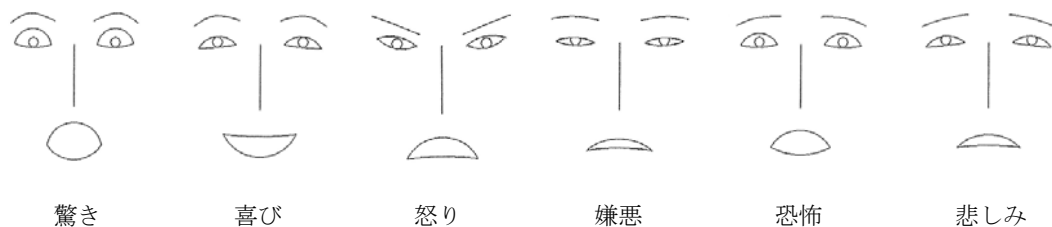


図2 6種類の基本感情の表情線画

表4 表情課題の内容

表情課題A	6種類の表情線画図形のカード（縦13.4cm×横9.5cm）を1枚ずつ見せ、それぞれの表情はどんな気持ちであるかを質問（命名課題）し回答を求める。その後、どんな時にその気持ちになるか（感情の事由）を質問し回答を求める。インタビューは、①驚き、②喜び、③怒り、④嫌悪、⑤恐れ、⑥悲しみの順で行う。
表情課題B	6種類の表情を順不同に並べたシート（6枚）から、実験者が教示した感情を表していると思われる表情を指さしで選択させる。教示は、①驚き、②喜び、③怒り、④嫌悪、⑤恐れ、⑥悲しみの順で行う。

### 3. 手続き

#### (1) 他者理解に関する課題

誤信念課題（心の理論課題）は、事実の質問、記憶の質問、誤信念の質問すべてに正答した場合に正解とし1点を与えた。「サリーとアン課題」と「スマーティー課題」とともに正解すると2点、どちらか1課題のみの正解では1点、どちらにも正解しなかった場合は0点とした。三つ山の課題は正答数を得点（4点満点）とした。

#### (2) 自己理解に関する課題

回答内容を、小島・池田（2004）を参考に表5の通り分類し、被験児の回答したレベルのうち、最も高かったレベルを自己理解の到達レベルとした。

表5 回答内容のレベル分け

<b>レベル1 身体的・外的属性</b> (身体的部位、所有物、社会的所属、名前、外面に関する評価語)
<b>レベル2 行動</b> (具体的活動、行動的特徴に関する内容)
<b>レベル3 人格特性</b> (外向性、協調性、勤勉性、全般的評価語に関する内容)

### (3) 感情理解に関する課題

表情課題A（インタビュー）については、6つの表情が表す感情（命名課題）の正答数を得点（6点満点）とした。どんな時にその気持ちになるか（感情の事由）の回答については、回答の可否、表情との一致・不一致について調べた。また、表情課題B（選択課題）については6つの表情の正答数を得点（6点満点）とした。

## 4. 分析の仕方

結果の分析にあたり対象群を以下のように分類し、仮説を立てた。

### (1) 健常群内での比較

幼児群（4歳と5歳、平均4.6歳）10名、児童群（6歳～8歳、平均7歳）10名の2群に分け、発達的变化を検討する。

### (2) 自閉群内での比較

#### (a) 生活年齢（CA）による比較

自閉群を低年齢（LCA）群（8歳未満、平均CA7.4歳、平均IQ90.7：標準偏差14.7）11名と高年齢（HCA）群（8歳以上、平均CA9.4歳、平均IQ80.7：標準偏差16.2）11名の2群に分け、生活年齢による差の有無を検討する。両群のIQ（FIQ）には有意な差は見られなかった（ $t(10) = 1.74$ , n.s.）。

#### (b) 精神年齢（MA）による比較

自閉群をMA7歳未満（LMA）群（平均CA8歳2ヶ月、平均MA6.3歳）10名とMA7歳以上（HMA）群（平均CA8歳8ヶ月、平均MA7.9歳）10名の2群に分け、精神年齢による差の有無を検討する。各群内のMAを同質にするために、MAが3歳9ヶ月（No.3）の児とMAが13歳（No.22）の児を除いた。

### (3) 健常群と自閉群との比較

健常群からCA7歳児8名と、自閉群からFIQが低い1名を除いたCA7歳児9名を取り出し、同年齢の健常群と自閉群の2群を設定し、両群の比較を行う。自閉群の平均IQは93であり、健常群のIQと同質と考えられた。

### (4) 予想される仮説

仮説1：他者理解に関する課題では、健常群においては幼児群よりも児童群の方が、自閉群においては、LCA群よりもHCA群の方が、LMA群よりもHMA群の方が成績が良いだろう。また健常群と自閉群との比較では、健常群の方が成績が良いだろう。

仮説2：自己理解に関する課題では、健常群においては幼児群よりも児童群の方が、自閉群においては、LCA群よりもHCA群の方が、LMA群よりもHMA群の方がより高いレベルの言及が可能だろう。

仮説3：感情理解に関する課題では、健常群においては幼児群よりも児童群の方が、自閉群においては、LCA群よりもHCA群の方が、LMA群よりもHMA群の方が成績が良いだろう。また、健常群と自閉群との比較では健常群の方が成績が良いだろう。

仮説4：自閉群において対象児が先行研究と比べ低年齢であっても、自己理解の到達レベルが高いものは、他者理解に関する課題の成績も良いだろう。また、自己理解、他者理解、感情理解の関連性は、自閉群よりも健常群により強く見られるだろう。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 他者理解に関する課題

##### (1) 健常群

幼児群、児童群の結果を表6に示す。誤信念課題2課題の合計得点、並びに三つ山課題の得点についてt検定を行った結果、誤信念課題の正答率は幼児群よりも児童群の方が有意に高く ( $t(9) = 3.28, p < .01$ )、三つ山課題でも同様に有意差が見られ ( $t(9) = 2.09, p < .05$ )、発達の差が示された。

表6 健常群における他者理解に関する課題の結果

	誤信念課題			三つ山課題 平均点
	サリーとアン課題 正解者数(通過率)	スマーティー課題 正解者数(通過率)	2課題の平均点 (正答率)	
幼児群 (n=10)	4 (40%)	8 (80%)	1.2点 (60%)	1.5点
児童群 (n=10)	10 (100%)	9 (90%)	1.9点 (95%)	2.6点

##### (2) 自閉群

生活年齢 (CA) の差による比較と精神年齢 (MA) の差による比較とを行った結果を表7に示す。誤信念課題2課題の合計得点並びに三つ山課題の得点についてt検定を行った結果、誤信念課題の正答率はLCA群よりもHCA群の方が有意に高く ( $t(10) = 2.61, p < .05$ )、HMA群よりもLMA群の方が有意に高かったものの ( $t(9) = 2.25, p < .05$ )、三つ山課題では双方とも有意な差は見られなかった ( $t(10) = -1.03, n.s.$ ;  $t(9) = -0.92, n.s.$ )。以上のことから、自閉群においては、生活年齢によって誤信念課題の正答率が異なり発達差の要因が示唆されたが、精神年齢の違いによる比較では仮説とは逆の結果となり、三つ山課題 (視点取得課題) においては生活年齢や精神年齢の違いによる成績差は見られなかった。



表7 自閉群における他者理解に関する課題の成績（CAによる比較、MAによる比較）

	誤信念課題			三つ山課題 平均点
	サリーとアン課題 正解者数（通過率）	スマーティー課題 正解者数（通過率）	平均点 （正答率）	
LCA群（n=11）	3（27.3%）	3（27.3%）	0.5点（25%）	1.8点
HCA群（n=11）	6（54.5%）	7（63.6%）	1.1点（55%）	2.3点
LMA群（n=10）	7（70%）	5（50%）	1.2（60%）	1.8点
HMA群（n=10）	2（20%）	4（40%）	0.6（30%）	2.3点

### （3）健常群と自閉群の比較

両群の結果を表8に示す。誤信念課題2課題の合計得点並びに三つ山課題の得点についてt検定を行った結果、両課題とも自閉群よりも健常群の方が有意に高く（ $t(15) = 3.673, p < .01$ ； $t(15) = 1.809, p < .05$ ）、生活年齢とIQが同程度であっても、健常群に比べ自閉群は誤信念課題の通過率及び三つ山課題の成績が有意に低いことがわかった。

表8 他者理解に関する課題の結果（健常群と自閉群の比較）

	誤信念課題			三つ山課題 平均点
	サリーとアン課題 正答者数（通過率）	スマーティー課題 正答者数（通過率）	平均点 （正答率）	
健常群（n=8）	8（100%）	7（87.5%）	1.9点（95%）	2.7点
自閉群（n=9）	3（33.3%）	3（33.3%）	0.6点（30%）	1.9点

### （4）仮説1に対する結果

健常群内の比較、健常群と自閉群との比較において仮説1は支持されたが、自閉群内の比較では仮説の支持は生活年齢による比較のみ支持された。

## 2. 自己理解に関する課題

インタビューで得られた回答内容を、身体的・外的属性（レベル1）、行動、人格特性の3つのレベルに分けた。2名の評定者が回答を分類した結果一致率は77.1%であり、評定者間で一致が認められなかった項目については2人が合議した上で決定した。レベル別の回答例を表9に示す。

表9 自己理解に関する課題（インタビュー）のレベル別回答例

	レベル	健常群	自閉群
好き	1	顔	体、手、
	2	走るところ	トミカばかりで遊ぶこと
	3	<該当なし>	<該当なし>
嫌い	1	<該当なし>	やっぱり変な顔なんですよー、
	2	怒られるところ	バカって言われるところと危険な幼虫に咬まれるところ
	3	<該当なし>	<該当なし>
良い	1	<該当なし>	足
	2	まあまあ足が速いかな	お手伝いしたりするところ
	3	<該当なし>	人気がある、誉められるところ
悪い	1	鼻と口（ただれている）	<該当なし>
	2	喧嘩をすること	ふざけたりすること、お片づけをしない
	3	<該当なし>	自分中心だみたいなことを言われる
定義	1	人間、普通の人	女の子
	2	遊ぶのが好き	給食を毎日残している人
	3	意地悪	優しい、正確な人
理想	1	サッカー選手	レストランの人、電車の運転手
	2	<該当なし>	弟を優しくしてあげる人
	3	<該当なし>	クールで男にモテモテの人
過去	1	目がちょっと大きい	赤ちゃん、ちっちゃい
	2	めばえで楽しく遊んどった	しゃべれなかった
	3	<該当なし>	かわいい子、風変わり

(1) 健常群

幼児群と児童群を比較した結果、年齢の上昇に伴い、レベル1の身体的・外的属性に関する言及が減少し、レベル2の行動に関する言及が増加した（表10、図3）。

表10 自己理解に関する課題におけるレベルごとの人数（幼児群と児童群の比較）

	レベル1	レベル2	レベル3	無反応・ない・わからない
幼児群 (n=10)	3 (37.5%)	4 (50%)	1 (12.5%)	2
健常群 (n=10)	0 (0%)	8 (88.9%)	1 (11.1%)	1

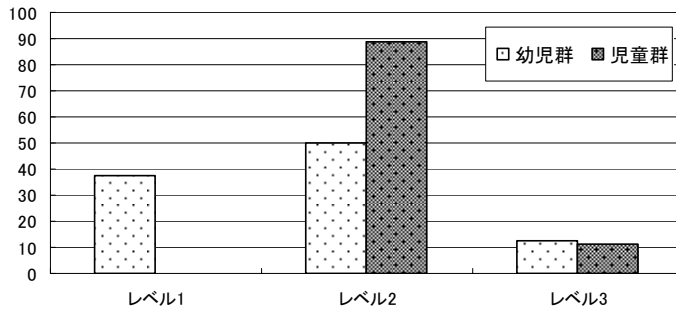


図3 自己理解に関する課題におけるレベル分け (幼児群と児童群の比較)

(2) 自閉群

生活年齢 (CA) の比較では、自閉群においても年齢の上昇に伴い、レベル2の行動に関する言及が減少し、レベル3の人格的特性に関する言及が増加した。精神年齢 (MA) による比較ではレベル3の人格的特性に関する言及が可能なものは、LMA群よりもHMA群の方が1名多いものの、レベル1の身体的・外的属性に関する言及でとどまっているものは、LMA群よりもHMA群の方が1名多かった。両群の結果を表11、図4、5に示す。

表11 自己理解に関する課題におけるレベルごとの人数 (LCA群とHCA群、LMA群とHMA群の比較)

	レベル1	レベル2	レベル3	無反応・ない・わからない
LCA群 (n=11)	3 (30%)	6 (60%)	1 (10%)	1
HCA群 (n=11)	2 (18.2%)	2 (18.2%)	7 (63.6%)	0
LMA群 (n=10)	2 (20%)	5 (50%)	3 (30%)	0
HMA群 (n=10)	3 (30%)	3 (30%)	4 (40%)	0

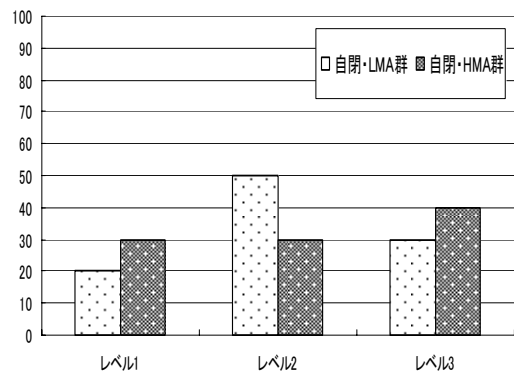
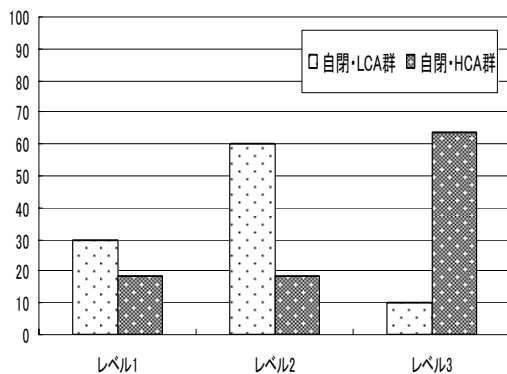


図4 自己理解に関する課題におけるレベル分け

(LCA群とHCA群との比較)

図5 自己理解に関する課題におけるレベル分け

(LMA群とHMA群との比較)

### (3) 健常群と自閉群の比較

健常群と自閉群を比較した結果、知的レベルに関して健常群と同程度とみなされる自閉群でも、レベル1の身体的・外的属性の言及にとどまっているものが3名いた（表12、図6）。

表12 自己理解に関する課題におけるレベルごとの人数（健常群と自閉群の比較）

	レベル1	レベル2	レベル3	無反応・ない・わからない
健常群 (n=8)	0 (0%)	6 (85.7%)	1 (14.3%)	1
自閉群 (n=10)	3 (33.3%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)	1

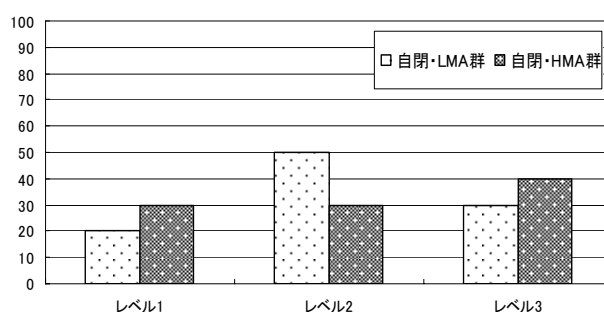


図6 自己理解に関する課題におけるレベル分け（健常群と自閉群の比較）

### (4) 仮説2に対する結果

自己理解の到達レベルの高さについて、健常群内での比較では仮説2が支持されたが、自閉群内の比較では生活年齢による比較のみ仮説が支持された結果となり、健常群と自閉群との比較では支持されなかった。

## 3. 感情理解に関する課題

### (1) 表情課題A（命名課題）の結果

健常群・自閉群ともに「喜び」、「怒り」といった単純な感情については高い正答率であり、「嫌悪」、「恐怖」が困難であった。「驚き」は幼児群・児童群の約半数が答えられたが、「驚き」以外の答えとして「怒った」、「悲しい」、「かわいそう」があり、いずれも陰性の感情語を用いていた。「悲しみ」は幼児群の半数が「わからない」との答えであった。「嫌悪」は健常群では「眠たい時」、自閉群では「寝て起きた顔」、「疲れた顔」、「暇な時の顔」等具体的な状況を例に出して答えているものが複数見られた。「恐怖」は児童群が「泣きそう」、「起きた時」との答えが見られたが、自閉群では「わからない」のほかに「笑ってる」という答えが複数見られた（表13、図7）。

表13 表情課題Aの平均点

	幼児群	児童群	LCA群	HCA群	LMA群	HMA群	健常群	自閉群
平均点 (6点満点)	2.9	3.2	3.8	3.8	3	3.2	4.2	4.7

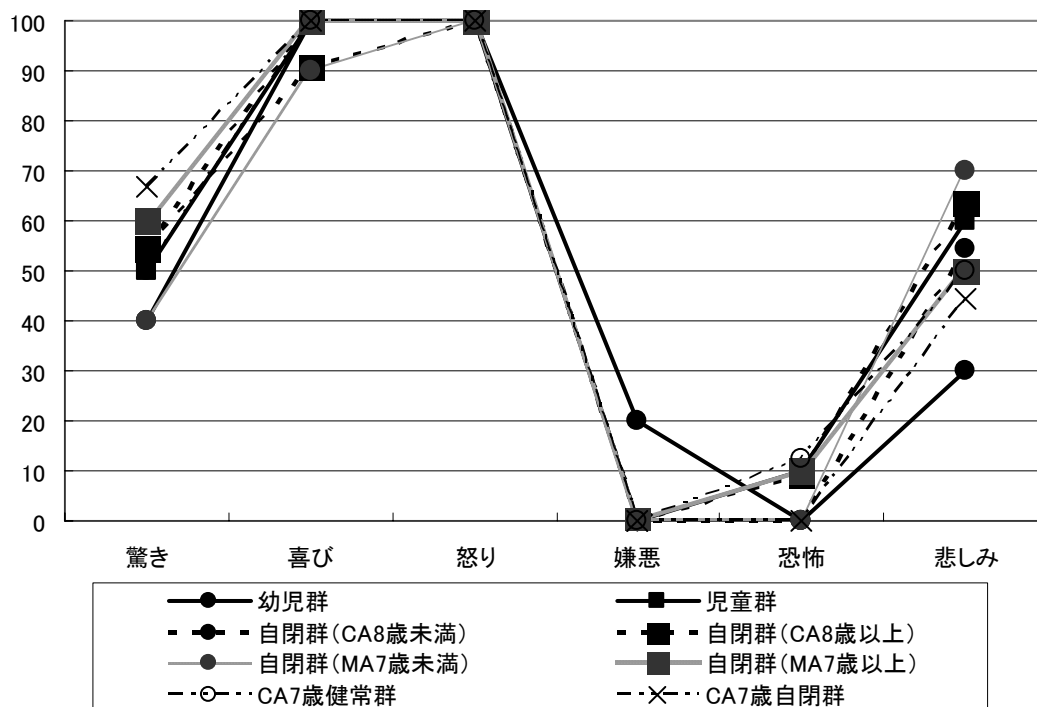


図7 表情課題Aにおける正答者数の割合

(2) 表情課題Aにおける事由の言及の一致率

健常群と自閉群の一致率の比較では大きな差は見られなかったが、健常群は命名課題では困難であった「嫌悪」、「恐怖」も他の感情と同程度に原因づけがなされており、「喜び」、「怒り」、「嫌悪」、「悲しみ」については他者との関わりについての言及が多く見られた。自閉群では「嫌悪」で成績差が見られ、HMA群の方が一致率が上回っていた。また、自閉群においては「怒り」、「嫌悪」、「悲しみ」において、他者との関わりについての言及が多く見られたが、「喜び」では人との関わりよりも「何か物を貰うこと」を挙げたものが多く見られた(表14、図8)。各感情で多かった事由の例を表15・16に示す。

表14 6感情の事由の一致率

	幼児群	児童群	LCA群	HCA群	LMA群	HMA群	健常群	自閉群
一致率 (%)	70	76	63.6	63.6	61.7	73	72.9	74

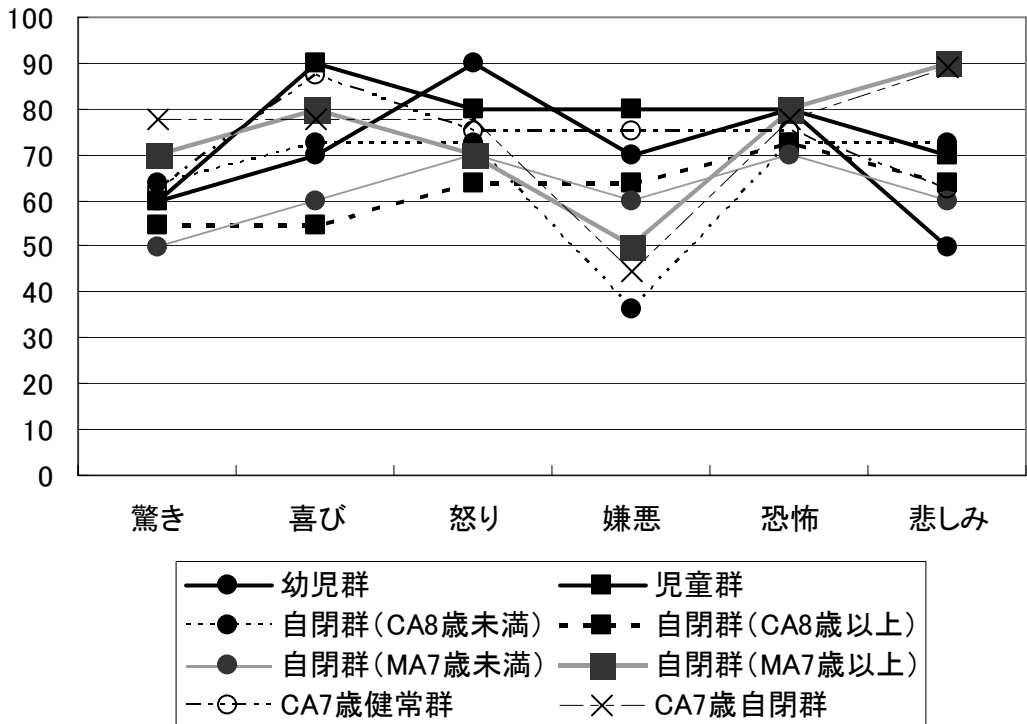


図8 表情課題Aにおける感情の事由が一致した人数の割合

表15 事由の例 (健常群)

驚き	わって驚かされた時、〇〇 (虫や動物など) がおった
喜び	友達と遊ぶ時、遠足、誕生日、〇〇 (プレゼント類) を貰った時
怒り	喧嘩、いじめられた
嫌悪	意地悪されたら (喧嘩を含む)、〇〇 (嫌いな食べ物) が出たら、遊ぶ人がいない
恐怖	お化けが出てきたとき (お化け屋敷、怖いテレビを含む)、蜂、真っ暗な時
悲しみ	怒られた時、喧嘩、〇〇がない (取られた)

表16 事由の例 (自閉群)

驚き	ビックリ箱、驚かせたら、先生が変わる
喜び	〇〇を貰える、行事 (誕生日、旅行)、1番になる (競争に勝つを含む)
怒り	悪いことをされた時 (いじめられた時)、〇〇を壊される
嫌悪	怒られる、〇〇したくないな (〇〇する時)
恐怖	お化け、夜 (暗い所)、ゲームオーバー (ゲームでの怖いワザ)
悲しみ	怒られる、いじめられる

(3) 表情理解課題Bの結果

「驚き」、「喜び」、「怒り」、「悲しみ」は健常群・自閉群ともに正答者数が9割以上と高かったものの、「嫌悪」、「恐怖」は健常群で4割以下、HCA群・HMA群で6割以下となった（表17、図9）。

表17 表情課題Bの平均点

	幼児群	児童群	LCA群	HCA群	LMA群	HMA群	健常群	自閉群
平均点（6点満点）	4.3	4.5	4.4	4.6	4.4	4.8	4.6	4.6

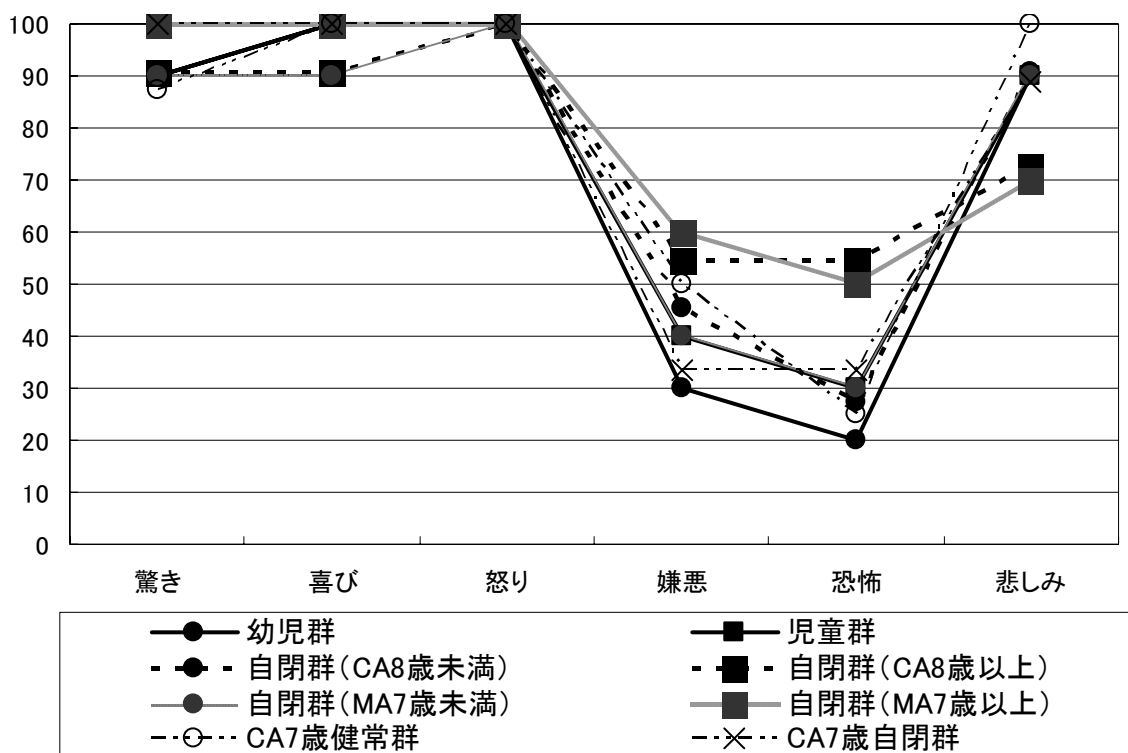


図9 表情課題Bにおける正答者数の割合

(4) 仮説3に対する結果

感情理解に関する課題については、健常群内の比較、自閉症群内の生活年齢・精神年齢による比較、また健常群と自閉群の比較では有意な差が見られず、仮説が支持されなかった。

4. 自己理解、他者理解、感情理解の関連性

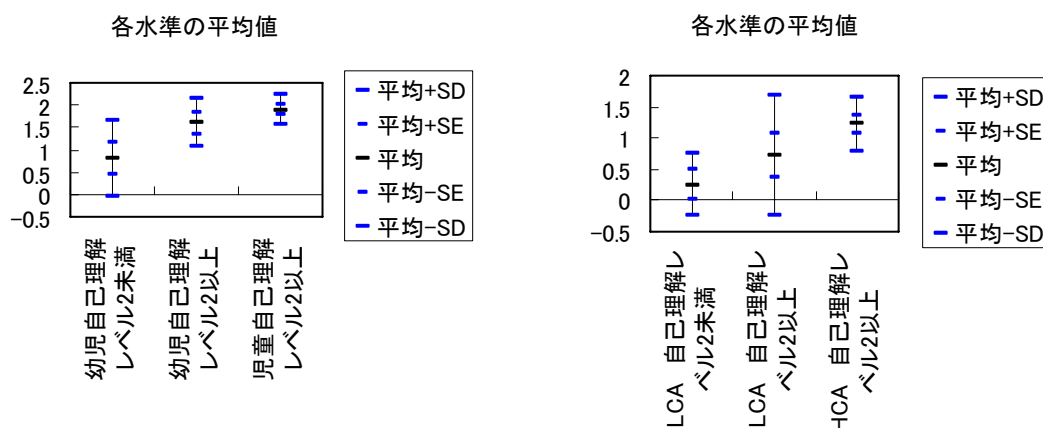
(1) 自己理解と他者理解の関連性

先行研究では自己理解の到達レベルを4段階にわけ、レベル3以上とレベル3未満で比較検討して

いるが、本研究では幼児・児童を対象としているため、レベル3以上に到達するものがわずかであった。そこで、各群を自己理解の到達レベルが2以上と2未満に分けて、健常群における幼児群と児童群、自閉群におけるLCA群とHCA群並びにLMA群とHMA群、CA7歳児における健常群と自閉群において他者理解得点（他者理解に関する課題における誤信念課題2課題の得点）との関連があるかどうかを検討した。

健常群において、自己理解の到達レベルが2未満の幼児群（幼児レベル2未満群）と2以上の幼児群（幼児レベル2以上群）、児童群（児童レベル2以上群）の3群について分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られ（ $F(2,16) = 6.296, p < .01$ ）、Fisherの最小有意差法による下位検査の結果、幼児レベル2未満群と幼児レベル2以上群、幼児レベル2未満群と児童レベル2以上群との間に有意差があり、幼児群において自己理解の到達レベルが2以上の群は自己理解の到達レベル2未満群よりも他者理解得点が有意に高かった。また自己理解の到達レベルが2以上になると、幼児群も児童群も他者理解得点に有意な差が見られなかった。

自閉群においては、自己理解の到達レベルが2未満のLCA群（LCAレベル2未満群）と2以上のLCA群（LCAレベル2以上群）、自己理解の到達レベルが2以上のHCA群（HCAレベル2以上群）の3群、また自己理解の到達レベルが2以上のLMA群（LMAレベル2以上群）と自己理解の到達レベルが2未満のHMA群（HMAレベル2未満群）、2以上のHMA群（HMAレベル2以上群）の3群について分散分析を行ったが、群間に有意な差は見られなかった（ $F(2,17) = 3.095, n.s.$ ;  $F(2,15) = 3.223, n.s.$ ）。Fisherの最小有意差法による下位検査の結果、LCAレベル2未満群とHCAレベル2以上群との間に有意差があり、生活年齢が高いほうが自己理解の到達レベルと他者理解得点との関連性が強いことが示されたものの、精神年齢による比較では関連性が示されなかった。

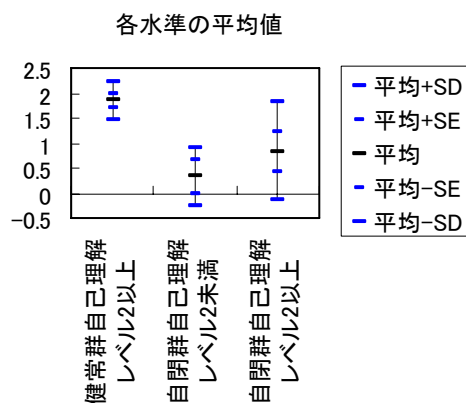


健常群と自閉群において、自己理解の到達レベルが2以上の健常群（健常レベル2以上群）、自己理解の到達レベルが2未満の自閉群（自閉レベル2未満群）と2以上群（自閉レベル2以上群）の3群



について分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られた ( $F(2,13) = 6.217, p < .05$ )。Fisherの最小有意差法による下位検査の結果、健常レベル2以上群と自閉レベル2以上群、健常レベル2以上群と自閉レベル2未満群に有意差があり、健常レベル2以上群は自閉レベル2以上群よりも他者理解得点が有意に高かった。

以上のことから、自己理解の到達レベルが同程度の高さであっても、自閉群より健常群の方が他者理解得点が高く、自己理解の到達レベルと他者理解得点との関連性が強いことが示された、自閉群については、CA7歳の時点で自己理解の到達レベルと他者理解得点との関連性は示されなかった。



## (2) 感情理解と他者理解の関連性

感情理解課題においては、「怒り」は健常群・自閉群とも全員が正答し、「嫌悪」、「恐怖」は健常群・自閉群ともに困難な課題であった。そこで、表情課題A（命名課題）における「驚き」「喜び」「悲しみ」の命名の得点（3点満点）を感情理解得点とし、各群において他者理解得点（他者理解課題における誤信念課題2課題の得点）と関連性があるかどうかを調べた。

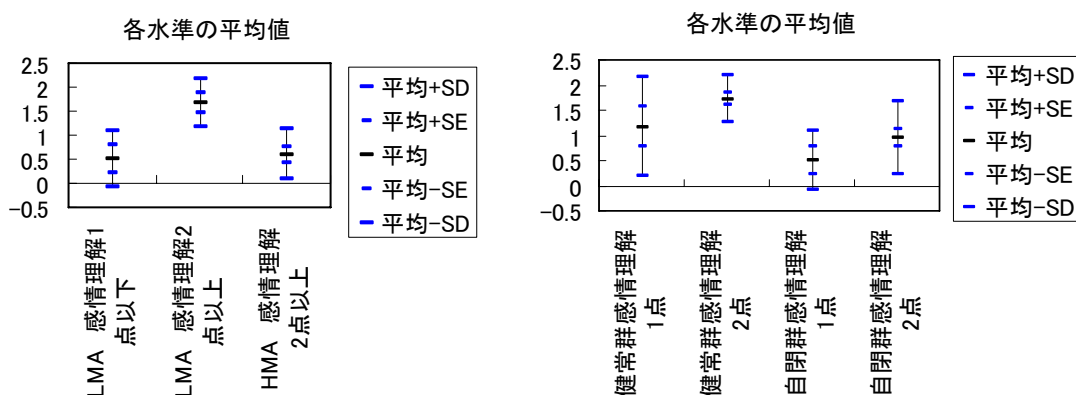
健常群では幼児1点以下群、幼児2点以上群、児童2点以上群の3群について分散分析を行った結果、群間に有意な差は見られなかった ( $F(2,16) = 3.47, n.s.$ )。

自閉群ではLCA1点以下群、LCA2点以上群、HCA2点以上群の3群について分散分析を行った結果、群間に有意な差は見られなかったものの ( $F(2,18) = 2.68, n.s.$ )、LMA1点以下群、LMA2点以上群、HMA2点以上群の3群において有意な差が見られた ( $F(2,17) = 9.0986, p < .01$ )。Fisherの最小有意差法による下位検査の結果、LMA群1点以下群よりもLMA2点以上群の方が、HMA2点以上群よりもLMA2点以上群の方が他者理解得点は有意に高かった。以上のことから、自閉群においては、精神年齢により対象群を分けた場合、LMA群において感情理解得点が高い方が他者理解得点も高いことが示唆されたが、精神年齢そのものは他者理解得点や感情理解得点と関連性が低いことが示

唆された。

CA 7 歳児の健常群と自閉群との比較において、健常 2 点以上群、自閉 2 点以上群について t 検定を行った結果、自閉 2 点以上群よりも健常 2 点以上群の方が他者理解得点が有意に高く ( $t(13) = 3.308$ ,  $p < .01$ )、健常群 (幼児群 + 児童群) と自閉群全体との比較では健常 1 点以下群、健常 2 点以上群、自閉 1 点以下群、自閉 2 点以上群の 4 群について分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られ ( $F(3,38) = 0.0055$ ,  $p < .01$ )、Fisher の最小有意差法による下位検査の結果、健常 2 点以上群の方が自閉 1 点以下群、自閉 2 点以上群よりも他者理解得点が有意に高かった。

以上のことから、健常群内、自閉群内では感情理解得点と他者理解得点との関連性は示唆されないものの、健常群と自閉群を比較したとき、健常群は感情理解得点と他者理解得点との関連性が示唆された。



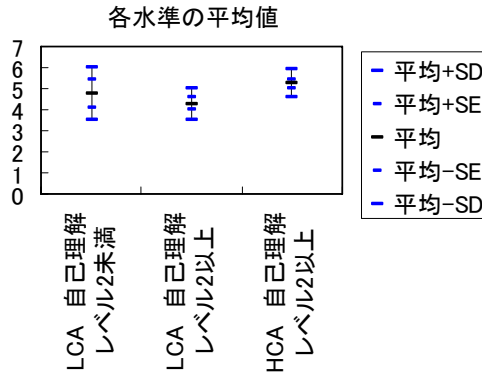
### (3) 自己理解と感情理解の関連性

各群において、自己理解の到達レベルと前項で用いた感情理解得点、表情課題 B の得点に関連性があるかどうかを調べた。

健常群において、幼児レベル 2 未満群 5 名、2 以上群 5 名、児童レベル 2 以上群 1 名の 3 群の各感情理解得点と表情課題 B の得点について分散分析を行ったが、群間に有意な差は見られなかった ( $F(2,16) = 0.81$ , n.s.;  $F(2,16) = 0.421$ , n.s.)。

自閉群において、LCA レベル 2 未満群 4 名、LCA レベル 2 以上群 7 名、HCA レベル 2 以上群 9 名の 3 群の感情理解得点と表情課題 B の得点について分散分析を行ったが、群間に有意な差は見られなかった ( $F(2,17) = 0.437$ , n.s.;  $F(2,17) = 2.51$ , n.s.)。Fisher の最小有意差法による下位検査の結果、自己理解の到達レベルと表情課題 B の得点において、LCA レベル 2 以上群と HCA レベル 2 以上群との間に有意差が見られた。一方、LMA レベル 2 以上群 8 名、HMA レベル 2 未満群 3 名、HMA レベル 2 以上群 7 名の 3 群の感情理解得点・表情課題 B の得点についてそれぞれ分散分析を行ったが群

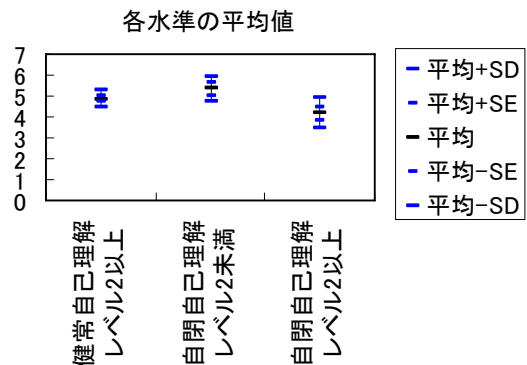
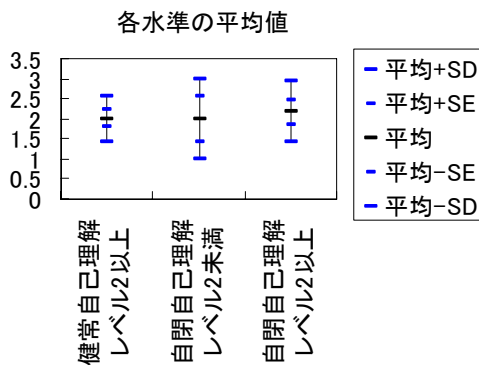
間に有意な差は見られなかった ( $F(2,15) = 3.36, n.s.$ ;  $F(2,15) = 0.0436, n.s.$ )。以上のことから、自閉群においては、HCA群においてのみ自己理解の到達レベルと表情課題Bの得点との間に関連性が示唆された。



(4) 健常群と自閉群の比較

①生活年齢7歳児における比較

CA 7歳児における健常レベル2以上群7名、自閉レベル2未満群3名、自閉レベル2以上群6名の3群の感情理解得点・表情課題Bの得点について分散分析を行った。その結果、感情理解得点については群間に有意な差はみられなかったが ( $F(2,13) = 0.099, n.s.$ )、表情理解Bの得点について群間に有意差が見られた ( $F(2,13) = 4.595, p < .05$ )。Fisherの最小有意差法による下位検査の結果、自閉レベル2未満群の方が、自閉レベル2以上群よりも表情理解Bの得点が高いことが示された。



②健常群 (幼児群+児童群) と自閉群全体との比較

非自閉群20名のうち、非自閉レベル2未満群6名、非自閉レベル2以上群14名、自閉レベル2未満群6名、自閉レベル2以上群16名の3群の感情理解得点・表情課題Bの得点について分散分析を行っ

た。その結果、感情理解得点、表情課題Bの得点について群間に有意な差は見られなかった ( $F(3,38) = 0.483, n.s.$ ;  $F(3,38) = 1.713, n.s.$ )。

以上のことから、自己理解の到達レベルをそろえて比較した場合、自閉群のみに、表情課題Bの得点において自己理解の到達レベルが2以上群よりも、2未満群の方が表情課題Bの得点が高いという逆の結果が示され、自己理解の到達レベルのみを統制した場合には、非自閉・自閉を問わず、自己理解と感情理解との関連性は描出されなかった。

#### (5) 仮説4について

自閉群における、自己理解の到達レベルの高さと他者理解に関する課題の成績の高さとの関連性は、HCA群において認められた。また、健常群では、幼児群において自己理解の到達レベルが高いほうが他者理解に関する課題の成績も高くなった。生活年齢を統一した場合、健常群と自閉群を比較すると、健常群の方が自己理解の到達レベルの高さと他者理解に関する課題の成績の高さとの関連性が強いことが示され、仮説4は支持された。

## IV. 考察

### 1. 他者理解に関する課題について

Wimmer & Perner (1983) が、4歳から6歳の間に子どもは「心の理論」の能力を身につけるようになることを主張した先行研究の結果、及びPiaget & Inhelder (1948) が子どもの空間認識の発達を調べるために考案した三つ山課題の研究結果から、健常群では「心の理論」課題と言われる誤信念課題、三つ山課題ともに幼児群よりも児童群の方が成績が良いとの仮説を立てた。本研究においても、児童群は誤信念課題を通過し、幼児群も半数が誤信念課題を通過できることが示され、先行研究と一致した結果となった。

三つ山課題は、知覚対象が現に存在する場面において、他人の見えを推測させる空間的視点取得であり、誤信念課題のような他者が何を考えているかの理解を調べる認知的視点取得の能力はより広い文脈で発揮されるものである(子安, 1999)。健常群においては、空間的視点取得、認知的視点取得の能力が幼児期から児童期にかけて伸びていくことが示された結果ともいえよう。

一方、自閉群に関して、Baron-Cohenら(1986; 1989; 1991)は、自閉症は「心の理論」が障害されており、その発達に遅れや偏りがあるとし、Priorら(1990)は、暦年齢や言語性精神年齢が上であるほど、誤信念課題に成功するものが増加すると報告している。これらの先行研究から、自閉群においてはLCA群よりもHCA群の方が、LMA群よりもHMA群の方が成績が良く、健常群と比較した場合では自閉群の方が成績が劣るであろうとの仮説を立てた。その結果、LCA群・HCA群にともに誤信念課題を通過するものが限られたが、年齢が高くなると通過率が上がることが示された。アニメー

ジョン版の「心の理論」課題を小学校2年生の広汎性発達障害児（IQは正常範囲）を対象に行った先行研究（藤野，2004）では通過率が36%であり、本研究のLCA群とHCA群との中間に位置すると考えられる。先行研究の知見の通り、自閉群は誤信念課題の通過が困難であるが、発達に伴い通過率が上昇することが示された。しかし、HCA群における通過率は50～60%代であり、通過できなかったものが通過できるようになるのか、それ以上伸びないのかは今後の課題である。一方、精神年齢による比較では、精神年齢が高いことが高い成績に結びつくとは言えない結果となった。その理由として、自閉症児は知的能力の個人内差、個人間差が大きく、言語性精神年齢による比較とはならなかったこと、また誤信念課題はIQで示されるような知的能力だけを反映しているものではないことが考えられる。

自閉症児に対する三つ山課題の研究は前例が少なく、本研究の自閉群のIQは正常範囲内と考えられる。そのため、健常群と同様に生活年齢や精神年齢が高い方が成績が良いのではないかと仮説を立てたが、生活年齢や精神年齢による有意な成績差は認められなかった。障害児に対する三つ山課題の研究では、情緒障害児の平均正答数が健常児群よりも有意に低いとの報告（Neale, 1966）や、自閉症児の空間理解能力の未発達を示唆した報告（大森, 1983）がある。先行研究とは直接的な比較はできないが、CA7歳の段階においても、健常児と比較して自閉症児は正答率が下回ることから、自閉症児の空間的視点取得の未発達は児童期の始めから見られており、健常児と同様に伸びていくことが難しいのではないかと考えられる。

別府（2005）は、高機能自閉症児は誤信念課題の解決において直観的理解の段階がないか、ごく短期間で、言語能力の保証により命題的理解に達すると報告している。本研究においても、誤信念課題を通過する自閉群は、例えばサリーアン課題において、ボールを入れ替えた女の子が出て行き、次に男の子が部屋に入ってくる時点で、「あー」「うわっ」と声を出し、知らない間にボールが動かされ、女の子が困るのではないかと心配したものもあり、実験者から見て直観的理解ができているように感じられた。また、三つ山課題では幼児群のような自己中心的反応は少ないが、見え方が変わるという意識が薄いのか、課題修了後に実際自分が動いてみて、「違うー」と驚いているものもいた。これら課題中のエピソードから、課題に取り組んでいる時のつぶやきであったり、どのように考えて答えを出したのかを聞いてみたりすることで、より自閉症児における「心の理論」の理解を深められるのではないかと考えられた。

子安（1999）は、「心の理論」は他者の心の理解である対人的知能と、自己の心の理解である個人内知能の両方に関わる研究分野であり、三つ山課題は対人的知能と空間的知能に関わる研究分野であるとしている。本研究では言語性知能の差による検討は行うことができなかったが、さらにメタファーやアナロジーに関連する高次の誤信念課題や、言語的知能の関与が低いとされる三つ山課題のような空間的視点取得課題での言語性知能との関係については今後の検討課題である。

## 2. 自己理解に関する課題について

健常幼児や児童を対象とした自己理解の発達についての先行研究（佐久間ら，2000）では、5歳児は「人格特性カテゴリー」よりも「行動カテゴリー」が有意に多く、小学校2、4年生になると「身体カテゴリー」が減り、「行動」、「人格特性」について言及することが報告されている。また、Montemayor and Eisen（1977）は児童期から青年期にかけて年齢の上昇に伴い、「身体的・外的属性」などから「人格特性」へと発達的变化が認められること、青年期には「人格特性」などの主観的・内面的な回答がほとんどになることを報告している。これらの先行研究から、健常群においては幼児群よりも児童群のほうが、また自閉群においてもLCA群よりもHCA群の方が、より上位のカテゴリーに言及するのではないかと考え、仮説を立てた。また、自閉群において精神年齢を比較した場合、精神年齢の高さに相応したカテゴリーの言及が可能になると考え、LMA群よりもHMA群の方が自己理解の到達レベルが高いと仮説を立てた。そして、自己理解の能力について健常群とIQが正常範囲である自閉群との比較をした先行研究は見当たらないが、本研究の主要なテーマである自己理解と他者理解の関連性があるとするならば、自己理解の到達レベルは、健常群の方が他者理解で劣る自閉群よりも高いのではないかと予測した。

本研究においても、先行研究と知的能力の発達水準が同程度と考えられる健常幼児群は、「人格特性」よりも「行動」についての言及が多く、健常児童群はさらにその傾向を強めている。また、児童群の7歳児では「身体的・外的属性」への言及が見られなかったことから、健常群における仮説は検証されたといえよう。そして、先行研究（佐久間ら，2000）で明らかになった5歳児の「行動」についての言及は小学校1年生ぐらいまで続き、2年生の頃より人格特性語を使用しての描出が顕著になるのではないかと考えられた。

自閉群においても、平均CA7.4歳のLCA群は「行動」への言及が最も多く、平均CA9.8歳のHCA群は「人格特性」への言及が最も多かった。この結果は、健常幼児や児童を対象とした先行研究（佐久間ら，2000）と同様であり、仮説が支持された結果と言える。しかし、本研究において、HCA群においてもなお「身体的・外的属性」への言及が多く見られることが特徴的であった。さらに、LMA群とHMA群を比較した場合、「身体的・外的属性」、「行動」、「人格特性」への言及には差が見られず、仮説が支持されなかった。この点についてはLMA群の平均MAが6.3歳、HMA群の平均MAが7.9歳であり、精神年齢の差が1.6歳とわずかであること、精神年齢に相当する健常群は「行動」についての言及と「人格特性」への言及が混在することから、有意な差として表れなかったことが考えられる。また、生活年齢を統一した場合、健常群と自閉群で自己理解の到達レベルの高さには有意な差が見られず仮説が検証されなかった。このことはCA7歳においては自己理解の能力と他者理解の能力の関連性が低いことを示唆しているのではないかと考えられた。

Lee and Hobson（1998）の自己概念に関する叙述内容の系統的分類を用いた研究では、自閉症者の自己概念の特徴が＜対人的＞領域で特異的に低下していること、自閉症者のみが乳児期の記憶を語

ったこと、さらに名前や声変わりなどの即物的手がかりをもとに自閉症者が自己の連続性を考察したこと等が報告されている。本研究でも、自閉群において、過去の自己については「赤ちゃん」ということばや乳児期の記憶への言及、髪形や生年月日などの即物的手がかりへの言及がみられたが、健常児においても自己定義に自分の名前を出すことや、過去の自己について、「赤ちゃんの時がよかった」「赤ちゃんの頃は名前がなかった」といった乳児期の記憶を語ることが見られた。このことから、自閉症児は年齢が上がってもなお乳児期の記憶や即物的手がかりをもとに自己の連続性を考えているといえるだろう。また、本研究では叙述内容を身体的・外的属性、行動、人格特性の3レベルに分けたが本研究の自閉群でも、行動のレベルに分けた中に「弟をかawaiiがってあげるところ」「お手伝いしたりするところ…(略)…お父さん起こしたり」「何か人に悪いこと、ちょっと嫌がることとかをする」といった<対人的>領域の言及もあり、それは健常群と大差はなく「特異的な低下」とは言えないと考えられた。これは本研究の自閉群が、先行研究の対象群よりも精神年齢が高い者が入っているためと考えられる。以上のことをまとめると、自閉群における自己理解は、生活年齢の上昇に伴い抽象的な「人格特性」についての言及も可能になり、対人的な関係における自己についても認知し言及することが可能であるが、「身体的・外的属性」における自己という意識を持ち続けることが特徴であるといえるだろう。本研究では、現在と過去という、その時点における自己理解を尋ねたが、今後は「どのように変わったか」という自己の変容についての理解を調べることで、自閉症児の時間概念をどのように捉え、どのように自己理解を深めていくのかを明らかにしていきたい。

### 3. 感情理解に関する課題について

本研究は、対象児に感情理解に関する課題に表情の命名課題、感情の原因(事由)の説明、感情語に合う表情の選択課題を課したため、表情の命名課題、感情の原因(事由)の説明において発達差や精神年齢の違いによる差が見られるのではないかと考え仮説を立てた。また、高機能自閉症青年の感情理解の成績が有意に低下しているとの先行研究(神尾・十一, 1997)から、生活年齢を統一した健常群と自閉群との比較では、健常群の方が感情理解に関する課題の成績が良いのではないかと考えた。

その結果、「喜び」「怒り」といった表情の違いが明確なものは、幼児群においても命名が可能であり児童群と差がみられなかったが、「悲しみ」は幼児群は児童群の半数に止まり、自閉群において、生活年齢、精神年齢による有意な成績差は認められず、仮説は支持されなかった。

Baron-Cohen (1991, 1993) は「喜び」、「悲しみ」、「驚き」は広汎性発達障害児が比較的容易に理解しやすい感情としているが、本研究の命名課題での「驚き」と「悲しみ」は健常群、自閉群ともに正答者は半数前後であった。Baron-Cohenら(1993)は「驚き」は予期や信念の理解を必要とする“認知的”な感情であるとし、社会的文脈刺激を用いた須藤(2006)は、広汎性発達障害児の「驚き」の感情理解は特殊なものでなく認知発達が進むにつれて獲得されていくと示唆している。本研究の対象児の年齢が須藤(2006)の研究よりも低かったために、幼児群と児童群あるいは自閉群におけるLCA群

とHCA群と間で差が見られなかったのかもしれない。しかし、吉井・吉松（2003）らが対象とした年長自閉症児（CA：14～18歳、平均IQ60）でも「驚き」の理解が困難であったことから、「驚き」の表情認知の発達については年齢、IQの統制、また何が認知発達の指標となるのか更なる検討が必要と考えられた。また、「悲しみ」における命名課題では、健常群・自閉群ともに「泣きそう」という表現が多数見られ、自閉群では「困った顔」という表現も見られた。本研究で用いた表情線画図形は眉毛、目、口等の形状を変形させ作られたものであるため、漫画やイラスト等で頻繁に書き込まれる涙は描かれていない。そのため、「涙が出ている」から「悲しい」という単純な理解で回答することが出来なかったのではないだろうか。

一方、感情語による表情の選択は、「喜び」、「怒り」に加え「驚き」、「悲しみ」も幼児群から理解可能であり自閉群においても差は見られなかったが、「嫌悪」や「恐怖」は健常児童群でも自閉症群でも正答者数が少なかった。その理由として、「嫌悪」や「恐怖」の顔は形態的にも似通っている（浜・鈴木・濱，2001）こと、「嫌悪」や「恐怖」の感情が表現される状況についての言及は他の感情と同程度の言及が可能であったことから、表情からでは陰性か陽性かの区別しつけられず、感情を推測するためには状況という情報源が必要であることが考えられる。

表情の命名課題や選択課題の正答者数の割合は健常群と自閉群で大きな差は見られなかったが、「どんな時にその気持ちになるか」との質問に対する回答に健常群と自閉群では質的な差異が見られた。「怒り」、「悲しみ」といった否定的感情においては自閉群においても他者を意識した回答があったが、「喜び」に関しては健常群では「人との関わり」についてあげるものが多かったのに対し、自閉群は「何か物が貰える」ことを挙げるものが多かった。また誤答反応からは、命名課題では顔の細かい造作を指摘したり、感情の原因でなく表情自体の説明に執着したり、感情の原因（事由）についての説明には、自分自身のことを言っているのか他者のことを言っているのかが曖昧であったり等、質問の理解の仕方のズレが見られた。生活年齢を統一した健常群と自閉群の比較でも、表情の命名、選択においても差は見られなかったが、感情の原因（事由）については、自閉群は健常群に比べ、「喜び」、「嫌悪」において人との関わりについての言及が少なかった。

神尾・十一ら（1997）は、感覚入力レベルにおける視覚処理を用いると考えられる表情理解課題と、対人場面と会話内容で登場人物の感情を推察する課題を行い、対人的認知を必要としない表情からの感情理解と、複雑な対人的認知を要する感情理解が密接に関連すること、そして、認知と感情は、自閉症に特徴的な対人的障害の不可分な2側面を表していることを報告した。本研究では、「どんな時にその気持ちになるか」を尋ね、人との関わりの点で健常群と自閉群に差異があることをあげたが、その他に表情の命名の際に「なぜその気持ちだと思ったのか」を問うことで、健常群と自閉群との違いや何を手がかりに感情を推測しているのか、知能モジュールの関連についての知見が得られるのではないかとと思われる。



#### 4. 自己理解と他者理解の関連性について

自己の心的状態の理解と他者の心的状態の理解の比較を検討した郷式（1999）は、自己の心も他者の心も同時期に理解されることを報告している。子安（1999）が知能モジュールの発達において、「ある知能モジュールのみに特異的に生ずる発達障害があること」をあげていることから、自己理解と他者理解の関連性は、自閉群よりも健常群で強く示されるのではないかと予測した。

その結果、健常幼児群において、郷式（1999）の主張のように自己理解の到達レベルの高さが他者理解に関連していることが示され、児童群においても関連性が確認された。一方、自閉群ではHCA群において自己理解と他者理解の関連性が示唆され、生活年齢の違いにより関連性の強さに差が見られる結果となった。これは、LCA群とHCA群を比較した時、HCA群は自己理解の到達レベルが2から3へと有意に変化するとともに、誤信念課題の通過率が上昇するという変化が見られること、自己理解課題の回答可能・不可能の分類において自己評価の「良いところ」の質問で、LCA群とHCA群との差が見られることから、発達に伴い他者理解と自己理解の関連性が強まることを示唆するものであると考えられる。また、生活年齢を7歳で統一した場合、健常群において自己理解と他者理解の関連性が示唆され、自閉群では関連性が示されなかった。以上のことから、自閉群において自己理解と他者理解の関連性があるとの仮説は支持されたが、発達段階によって関連性の強さが異なることが明らかとなった。また、健常群では幼児期において自己理解と他者理解の関連性が明らかとなり、児童期においても関連性を持って発達していくことから、自閉群よりも健常群の方が自己理解と他者理解の関連性が強いとの仮説が支持されたと考える。自閉群において年齢が低い場合に、自己理解の能力と他者理解の能力が関連しないことは、自閉症が「対人的知能」に特異的に生じた発達障害とも言えるが、年齢が上がるにつれ関連性が示されることから、発達に伴う個人内差、個人間差について、今後より詳細な検討が必要であろう。

ところで、本研究の対象となった自閉群はIQがほぼ正常範囲内である。健常群が誤信念課題を通過する時点での自己理解の到達レベルが1から2であるのに対し、自閉群が誤信念課題を通過する時点での自己理解の到達レベルは2から3である。このことは、単に自閉群の誤信念課題の通過が遅れるだけであり、自己理解の到達レベルは健常群と同程度に変化した結果であるのかもしれない。しかしながら、「心の理論」が直観的理解であるならば、自閉症児は生得的な知覚の過敏性、注意集中の過剰ないし散漫等の特性を持ち合わせていることが多く、直観的理解の土台となる乳幼児期の愛着形成が遅れやすく、情動的経験による自-他の確立が困難である。また、成長しても自分にとって不快な刺激を見分け、避けることに意識が向かい、他者への関心が結果的に低くなるのかもしれない。これらの憶説については、支援の視点として今後より個別的質的な検討が必要であろう。

#### 5. 感情理解と他者理解の関連性について

Baron-Cohen (1991, 1993) において広汎性発達障害児が比較的理解しやすい感情としている「喜

び、「悲しみ」、「驚き」の命名課題を指標として他者理解課題（誤信念課題）との関連を検討した。その結果、健常群において感情理解と他者理解（誤信念課題）の関連は示されなかったものの、自閉群においてはLMA群において感情理解得点が高いものの方が他者理解得点も高く、感情理解と他者理解の関連が示唆された。

健常群において感情理解と誤信念課題の関連性が見られなかった点については、幼児期における心の理論や感情理解の発達には広範な個人差が見られ、月齢や言語能力が同程度である場合、心の理論が発達している者ほど感情理解も発達している傾向があること（森野，2005）、心の理論発達と感情理解発達が異なる道筋で発達し、心の理論発達と感情理解の発達に異なった側面が存在すること（Cutting&Dunn，1999）を裏付ける結果と言える。

また、自閉群において他者理解と感情理解に有意な関連が見られなかったことは、表情の理解と心の理論との間に相関がなかったとするOzonoff（1991）らの知見と一致したものであった。また、自閉症青年を対象にした研究でも、二次の誤信念課題を通過するものが一次の誤信念課題でとどまるものよりも感情理解の成績が良好であるという結果が得られず、心の理論は感情理解に積極的な役割を果たしていないと結論づけている報告もある（神尾・十一，1997）。一方、LMA群においては、感情理解得点が高いほうが他者理解得点も高い結果となったが、精神年齢が高いということは感情理解（本研究では表情認知）の高さを示すものの、それが他者理解（誤信念課題）とは結びつかないことを示唆しているとも考えられるが、本研究での対象群が10名と少ないためにこのような結果になったことも十分に予想される。

自閉群において感情理解課題と他者理解課題との間に明確な関連が見られなかったことは、子安（1999）の知能のモジュールの相対的独立性を裏付ける理由の1つとしてあげられている「ある知能モジュールのみに特異的に生じる発達障害があること」の裏づけともなりうるし、モジュール相互に発達の刺激のやりとりができない所に自閉性障害の特徴があるとも考えられる。

## 6. 自己理解と感情理解の関連性について

本研究では自己理解の到達レベルと命名課題では有意な関連が見られなかった。対象群の数が少ないため誤差の範囲とも考えられるが、対人的認知を必要としない表情からの感情理解と複雑な対人的認知を要する感情理解が密接に関連している（神尾、十一ら，1997）ことと、対人的認知に関わる他者理解と自己理解との関連が示唆されていることを整合すると、感情理解と自己理解の間接的な関連性を仮定することができる。

吉井・吉松（2003）の先行研究では自己理解と感情理解との直接的・数量的な比較はなされておらず、自己理解の到達レベルが高いものは、命名による感情理解得点も高く、感情の原因について他者を意識した回答をしていると述べている。また、健常者を対象にfMRIを用いた最近の研究では、内側前頭前野（medial prefrontal cortex : MPFC）が、自己評価の認知的過程と情動的過程とを介した自

己評価判断を支える異なるプロセスの基盤をなしているのではないかと推測されている。また、MPFCと「心の理論」との関連も研究されており（Schmitzら，2006；Gallagherら，2000）、神経心理学的観点からは自己理解と感情理解、他者理解が不可分であることを示唆している。

本研究における自閉群も、自己理解の到達レベルが高いものは、感情理解（命名課題、選択課題を含める）の得点も高かったが、感情の原因については質問の意図とずれた回答のものが多かった。しかし健常群が「喜び」の原因には他者を意識し、他者とともに何かすることを挙げており、自閉群とは質的な違いが見られていた。先行研究と比べて対象群の年齢が低いこともあり、発達途上であることや表現の仕方の差も十分考慮する必要はあるが、自閉群において、自己理解のレベルが高いことが真に感情理解の能力が高いということにつながるのかは、より質的な検討が必要であると思われる。

## 7. 支援のあり方について

自閉症群は健常群と比較して誤信念課題の通過や視点取得が遅れるものの、年齢とともに発達していく可能性が高いこと、自己理解においては身体的・外的属性への言及も見られるが、健常群と同様に自己認知ができていくこと、感情理解においても健常群と変わらないことが示された。また、他者理解、自己理解、感情理解に関する能力に関与すると考えられる、知能モジュールの相対的独立性の検討を行う中で、これら3つの能力の関係性が示唆された。この結果は吉井・吉松（2003）が述べるように、自閉性障害児の他者理解力を高めるためには、自己理解や感情理解に関する能力を高めていく教育的支援が大切であることを支持する結果と言える。

また、3歳前の子どもを取り巻く家族の会話での感情や因果関係への言及と、半年後の誤信念課題での行為の説明との間に関連があったというDunnら（1991）の報告から、自閉症児では感情を表現する用語を用いる行動自体の量よりも、会話をする家族の相互作用の質が「心の理論」の発達に影響があると考えられている。

自閉症の治療プログラムとして広く世界に受け入れられているTEACCHは、アメリカのノースカロライナ州における地域で実践されてきた総合的な治療プログラムであり、自閉症の認知障害の克服、適応的な行動の形成に焦点が当てられている（杉山，2006）。しかし、杉山（2006）は自閉症の中心は社会性の障害であり、適応的な行動を積み上げることだけで社会性の障害が克服できるのであろうかと疑問を投げかけている。社会性の克服のためには、自閉症の認知障害を突破しなくてはならないが、現状は社会性の障害を焦点に当てたプログラムが最近になってやっと出始めた状況である。

本研究では生活年齢を7歳で統制した健常群と自閉群の児童の比較も試みた。知的レベルは同程度ながらも誤信念課題の通過に差がみられたが、自己理解、感情理解において量的な差は見られず、質的な違いが示唆された。また、この段階では自己に対して否定的なイメージを語るものは少ないものの、保護者や教師といった周りの大人からの評価や友人関係のあり方によって自己のイメージが肯定的にも否定的にも変化する可能性がある。障害の有無を超えて、同じ通常学級の中で学ぶ彼ら、彼女

ら一人ひとりが自己評価を保ち、他者との良好な関係性を意識させる体験が積み上げられるような関わりや支援のあり方を、長期的な観点からさらに検討していくことが重要であろう。

#### 引用・参考文献

安達潤 2005 軽度発達障害を持つ子どもの思春期. 児童心理, No. 825, 41-46

Anthony Lee and R. Peter Hobson 1998 On developing self-concepts ; A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 8, 1131-1144

Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. 1985 Dose the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.

Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. 1986 Mechanical, behavioral and intentional understanding of picture stories in autistic children. *British Journal of Developmental Psychology*, 4, 113-125.

Baron-Cohen, S. 1989 The autistic child's theory of mind : A case of specific developmental delay. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 30, 285-297.

Baron-Cohen, S. 1991 Precursors to a theory of mind : Understanding attention in others. In Whiten, A. (Ed.), *Natural theories of mind : Evolution, development and simulation of everyday mindreading*, 233-251. Basil Blackwell.

Baron-Cohen, S., Spitz, A., & Cross, P. 1993 Do children with autism recognize surprise? : A research note. *Cognition and Emotion*, 7, 6, 507-516.

別府哲 2005 高機能広汎性発達障害児の他者理解と自己理解—機能関連の特異性—. *心理学*, 第26巻, 第2号, 87-88

Cutting, A. L., & Dunn, J. 1999 Theory of mind, emotion understanding, language, and family background : Individual differences and interrelation. *Child Development*, 57, 194-201.

Ekman, P., Friesen, W. V. 1978 *Facial Action Coding System (FACS) : A technique for the measurement of facial action*. Consulting Psychologist Press, Palo Alto.

遠藤利彦 1997 乳幼児期における自己と他者, そして心—関係性, 自他の理解, および理論の関連性を探る—. *心理学評論*, 40, 57-77.

Feshbach, N. D. 1987 Parental empathy and child adjustment/maladjustment. In N. Eisenberg & J.Strayer (eds.), *Empathy and Development*.

藤野博 2004 自閉症スペクトラム障害の心理アセスメントにおける“心の理論”課題の意義. *東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学*, 55, 293-300

Gallagher, H. L., Happe, F., Brunswick, N., et al. 2000 Reading the mind in cartoons and

- stories :An fMRI study of ‘theory of mind’ in verbal and nonverbal tasks. *Neuropsychologia*, 38 : 11-21.
- 郷式徹 1999 幼児における自分の心と他者の心の理解－「心の理論」課題を用いて－. *教育心理学研究*, 1999, 47, 354-363
- 浜治代・鈴木直人・濱保久 2001 感情・情緒へのアプローチ. *新心理学ライブラリ17 感情心理学への招待*. サイエンス社
- 波多野誼余夫 2003 感情の理解の発達. 波多野誼余夫・高橋恵子編 *感情と認知*, 64-69, 放送大学教育振興会
- 石坂好樹 1997 <展望>自閉症と「心の理論」－自閉症は心を読めないか－. *自閉症と発達障害研究の進歩*, Vol. 1, 3-17
- 神尾陽子・十一元三・石坂好樹・全智奈 1997 高機能自閉症における他者の感情の理解－心の理論との関連について－. *精神医学*, 39, 10, 1089-1095
- 小島道生・池田由紀江 2004 知的障害者の自己理解に関する研究－自己叙述に基づく測定の試み－. *特殊教育学研究*, 42, 3, 215-224
- 子安増生 1999 幼児期の他者理解の発達－心のモジュール説による心理学的検討－. 京都大学学術出版会
- 子安増生 1990 時－空間の認識と表現, 及びその心理学的測定について. 河合隼雄 (研究代表者), 平成元年度特定研究・研究成果報告書『時－空間の体験とその認識に関する心理学的研究』(pp. 65-80). 京都大学教育学部.
- 久保ゆかり 1992 他者理解と共感性. 木下芳子編 *新児童心理学講座*, 8, 173-215, 金子書房
- Montemayor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conception from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- 森野美央 2005 幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連. *発達心理学研究*, 16, 1, 36-45
- Neale, J. M. 1966 Egocentrism in institutionalized and noninstitutionalized children. *Child Development*, 37, 97-101.
- 大森茂 1983 自閉症児の空間概念形成に関する実験的研究 (I)－視点の変換を中心として－. *日本心理学会第47回大会発表論文集*, 442.
- Ozonoff, S., Pennington, B. F. & Rogers, S. J. 1991 Executive Function deficits in high-functioning autistic individuals : Relationship to theory of mind. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1081-1105
- Piaget, J., & Inhelder, B. 1948 *La Psychologie de l'espace chez l'enfant*. Presses Universitaires de France. (Translated by F. J.Langdon & J. L. Lunzer, “The child’s conception of space.”)

- Routledge & Kegan Paul, 1956.)
- Premack, D., & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526
- Prior, M., & Hoffmann, W. 1990 Neuropsychological testing of autistic children through an exploration with frontal lobe tests. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, Vol, 20, 581-590.
- 佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 2000 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して. *発達心理学研究*, 第11巻, 第3号, 176-187
- 笹屋里絵 1997 表情および状況手掛りからの他者感情推測. *教育心理学研究*, 45, 312-319.
- Schmitz, T. W., Johnson, S. C. 2006 Self-appraisal decisions evoke dissociated dorsal-ventral aMPFC networks. *NeuroImage*, 30 : 1050-1058.
- 須藤邦彦 2006 広汎性発達障害児の感情理解に関する研究－喜び, 悲しみ, 驚きをサンプルとして－. *明星大学心理学年報*, 1-16
- 杉山登志郎・辻井正次 2001 高機能広汎性発達障害. *児童青年精神医学とその近接領域*, 42, 114-123
- 杉山登志郎 2006 <解説>RDI自閉症治療の新たな地平へ. 杉山登志郎・小野次朗(監修) *自閉症／アスペルガー症候群 RDI「対人関係発達指導法」－対人関係のパズルを解く発達支援プログラム－*, 13-21, クリエイツかもがわ
- Wimmer, H., & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs : Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, 13, 103-128
- Wing, L. & Gould, J. 1979 Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children : Epidemiology and classification. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9, 11-29.
- Yamada, H. 1993 Visual information for categorizing facial expression of emotions. *Applied Cognitive Psychology*, 7. 257-270.
- 吉井秀樹・吉松靖文 2003 年長自閉性障害児の自己理解, 他者理解, 感情理解の関連性に関する研究. *特殊教育学研究*, 41, 217-226